

2024年2月9日 鳴門紀行 Impressions of the Naruto Travel on February 9th, 2024

津村 禮次郎
TSUMURA Reijiro

立春は過ぎたとはいえ、まだまだ早春と言えない中、大鼓方の大倉正之助さんが主宰する「飛天双〇能」が企画主催する伊勢神宮奉納五番能の「翁」を勤めることになった。双〇は「ふたわ」と読み月初の八の日に巡回公演をするものである。今年は2回目ということで2月8日となり、伊勢神宮内の参集殿能舞台での公演である。日本最大の聖地で、上演に当たり出勤する能楽師は4日間の精進潔斎を行い、早朝の内宮に参拝して舞台に臨んだ。能楽師としても私としても得難い機会であった。

終演後紀伊半島を西へ横断し、翌9日に大阪から鳴門へ渡った。創作能「鳴門の第九」の制作、上演を宗片先生から託され、その重大任務に向け現地のリサーチを行う為である。さすがに瀬戸内海を渡ると春の空気が匂ってきた。知友の地元ということで車を出して頂き、まだ巡礼の人影が見えない鳴門路を走った。途中、一番霊場霊山寺門前を過ぎたが、車中一礼をなして帰路に寄ることとした。

板東の交通標識を過ぎて少し山側に進み、まずはドイツ館に入った。「板東俘虜収容所」の資料館であるが、想像以上に立派な洋館で展示の資料も充実している。第一次世界大戦による欧州の世界情勢がアジアに及び日本も関わることになり、中国青島等のドイツ軍の将校、兵士の捕虜収容がこの板東に地に集結させられ、1000名を越える大収容所となり、終戦に至るまでの3年間（1917・4～1920・2）この地で機能した。

しかしこの板東俘虜収容所はいわゆる捕虜の収容所とは異なり、会津出身の所長・松江豊寿大佐の方針と計らいで、捕虜を拘束するのではなく文化的自主を重んじる扱いであった。それにより自国の文化を大いに生かし、音楽、食事などを楽しむことが出来た。また地元徳島の人々との交流も盛んであった。

特筆すべきは1918年6月1日、ベートーベンの第九交響曲を収容所内で演奏した。勿論それには演奏技術の習得、合唱団の編成など、地道な活動の継続があったことが、展示されている資料で丁寧に明らかにされている。第九初演の地・鳴門を今に残している。

また収容所閉鎖後も何人かは日本に残りドイツ文化を伝えた。殊に食文化は現在の我々が享受しているパンやドイツ菓子はここに起源があるという。正に人類共存の実践で驚きであった。モデル人形が演奏する第九を聞いてドイツ館を離れた。

メイン道路をわき道に入った所に公園として保存されている収容所跡地を訪ねた。ゆるやかな丘陵の谷あいであり格好の地形である。下手は既に集合住宅となっはいるが、二つの遊水

池が当時のままあり鷺が羽を休めていた。少し坂道を上ると小道の傍らに所内で死亡した兵士を埋葬する石塔があり、鳴門の市民が建立した銅板に碑文が記された顕彰碑が堂々と立っている。現在から未来へと鳴門とかの地との交流を維持し、平和を祈る命の尊さであると感じた。

この度の宗片先生の新作創作能「鳴門の第九」の上演に当たり、一つの覚悟を得た小さな旅であった。